

立石恒雄・木場由紀子 編

言語聴覚士のための子どもの聴覚障害訓練ガイドンス

能登谷晶子（金沢大学保健学科）

本書は、聴覚障害幼児を対象とした聴力検査、補聴器装用、人工内耳のマッピング、聴能言語指導の実際について、具体的な症例を提示しながら訓練経過をまとめたものである。第1章の「聴力検査と補聴器」では、乳幼児の聴力検査を担当する現場の言語聴覚士にとって必要な検査の具体的な方法や注意点が書かれている。また、両側外耳道閉鎖症例や重複症例に対する補聴器の装用指導経過や両親指導などについても触れられている。第2章の「小児の聴能言語指導」では、前言語期レベルから構文レベルにいたる指導の経過がまとめられている。第3章の「幼・小児の人工内耳」では、各症例のマップが実際に提示されているので、臨床で人工内耳のマッピングをしている言語聴覚士にとって大変役立つところである。

実際の臨床場面では、ABR、COR などによってわが子の聴覚障害が明らかとなった場合にも、家族にわが子の聴覚障害を受容してもらうことは容易ではない。本書には随所に長年聴覚障害幼児の臨床を実践してきた言語聴覚士が臨床場面でやっているさま

ざまな工夫も記載されており、まだ臨床経験が浅い言語聴覚士にとって大変心強いものになっている。

聴覚障害を担当する言語聴覚士は総合病院の耳鼻咽喉科、難聴幼児通園施設、聾学校、耳鼻咽喉科開業医などで働いている場合が多いと思われる。現在、聴覚障害の言語訓練を行っている言語聴覚士にとっても大変役に立つ1冊であるだけでなく、これから言語聴覚士をめざしている養成校の学生や保健師、看護師、学校の聞こえや言葉の教室担当者にとっても役立つ本である。聴覚障害児童を扱う大変さとともに、聴覚障害の領域が言語聴覚士にとってとてもやりがいのある領域であることも本書を御一読されれば伝わってくる。

最後に、地方ではまだまだ聴覚障害は聾学校で訓練するものとしか思いつかない医療関係者も多い。しかし最近は、総合病院のみならず、一般の耳鼻咽喉科にも言語聴覚士が配置されるようになり、聴覚障害幼児の訓練が居住地の近くで可能になりつつあることを付け加えておく。

〔A5 256頁 3,675円（税込み） 2004 医学書院 刊〕